

はは  
姑・サツキ③

平成元年、すでに村内に就職していた幸一は、この年に志子（ゆきこ）と結婚する。新潟生まれの世間知らずな嫁は、つまり私の事だが、昭和村で様々なカルチャーショックを経験するが、それはいずれ機会があれば書き留めてみたい。

姑は結婚式を終えて間もなくの頃、「財布も台所も全部ゆっこに任せた！」と言って、肩の荷を下ろした。苦労を重ね70年を生きてきた顔には、深くて美しいシワが刻まれていた。

私は隣町に就職し、その後平成3年に出産。姑にとっては待望の内孫の誕生だ。妊娠したことを伝えると、姑は万歳をして、飛び切りの笑顔で喜んでくれたことを今でも思い出す。

同じころ舅の幸次は喉頭がんを発症し手術したため、左半身マヒの上に声を出すことが出来ないという重複する障害を負い、いっそうの気遣いが必要となった。それでも姑は、快く子守を引き受けてくれた。いや、子守りをしたいと言ってくれたのだ。

育児休業の制度はまだ整っていなかったが、私は何とか仕事を続けたかった。一番は経済的理由だ。まだ若い夫の給料は心細く、ボーナス時期になるとあれやこれやと未払いの請求書が来た。加えて結婚して最初の年末、農協から借入金返済の書類が届いた。返済期間はまだ数年先までであった。この家の生活苦の続きは、終わっていなかったのだ。姑はこの家の借金も含めて、私に「財布を任せた」訳だ。それに就職した先は、短大を出た私の資格が少しばかり役立つ仕事で、職を手放したくはなかった。

産後8週で私は仕事に復帰し、姑は、孫の子守りをとても嬉しそうに、それはそれは可愛がって育ててくれた。

しかし、この頃から徐々に物忘れや聞き直しが多くなっていった。例えば、ミルクはどのくらいの量を飲ませたら良いかが覚えられなかったり、昼寝の時間を聞いても「忘れちゃった」と言われたり。それでも、ノートを準備してメモしてもらったり、あらかじめミルクの粉を哺乳瓶にセットして、お湯を入れるところに印をつけたりして対策し、保育所に入るようになるまでの2年半は子守りを頑張ってくれた。

そして平成6年。この年の春に孫は保育所に入所。姑の負担を考え通常より1年早く入所させてもらった。

この頃から姑は、今まで出来ていたことが少しずつ出来なくなっていった。当時老人クラブの地区の役員をやっていたが、簡単な計算が出来ず集金してもおつりを間違えるなどのトラブルがあると会員の方から連絡があった。家では鍋をいくつも焦がし、炊飯器や洗濯機も使えなくなり、体が覚えているはずの畑仕事もいっこうにはかどらず、作物にならなかった。

色々な場面で失敗することが多くなり、その都度落ち込み、感情が不安定になることが度々あった。

何度も同じことを聞き返したり、亡くなった人の事をまだ生きているはずだと言い張ったり、でも、いい加減な返答をすると怒り出すこともあった。姑はいつも真剣だったのだ。

幸次も幸一も、変わってしまった姑にとまどい、つい対応がきつくなって姑は泣き、家族は自分の言動を反省して落ち込む、という負のスパイラル。我が家からは徐々に笑顔が消えていった。

そして秋ころになると症状はいっそう進行し、私や孫が分からなくなることがあった。

「家の2階に子連れの子知らない女が居る。」と言う。

私の笑顔も消えかけた。さらに夕方になると「家に帰る」と徘徊が始まるようになった。徘徊の前には必ずタンスのものを全部出して「荷造り」するので、仏間や座敷は泥棒に入られたかのように散らかり放題。そして何点かを風呂敷に包み「お世話になりました。今夜は家に帰ります」と丁寧にあいさつして家を出る。

「では、家まで送らしましょう。」と姑を車に乗せてしばらくドライブして帰ってくるが、「ここではない」と言われてまた出ていこうとすることも多かった。

姑は知らない世界に迷い込んだかのような焦燥感が常に漂っていて、痛々しかった。認知症は治らないと分かってはいたが、せめて笑顔を取り戻して欲しかった。